ウリハスパティの真理(3)

安　藤　　充

本誌前2号に発表した“Wṛhaspatitattwa”と題する古ジャワ語文献の和訳（安藤2005; 2006）の続きを，今回で完結する（サンスクリット第51–74偈とそれぞれの古ジャワ語解説）。テキストの紹介及び訳出や表記に関する注意書きについては，(1)を参照されたい。

51

〈道を成就に至らしめる智慧とは何か。最高の苦行と誓いとは何か。崇敬するシワ神よ，最高なるものについて私めに如実にお話し下さい。〉

「主よ，いったいどの智慧の道が，最高なるもの（wiśeṣa）と呼ばれるものを獲得する正しい手段なのでしょうか。それが得られますように[1]。苦行及び誓いとはいかなる類いのものでしょうか。どうぞ主の子（である私）を慈しんで，道となる苦行と誓いについて正しくご教示下さいますよう。」

主は答えて言った。「我が子よ，そなたの見事な質問である。聖なる最高のもの（saṅ hyaṅ wiśeṣa）（すなわち）[2]最高の意義を獲得する手段とは次の通りである。

52

〈解脱は三つの方法，すなわち，豊かな知識によって，感覚の遮断という方法によって，そして，渇愛という悪を滅することによって，獲得される。〉

解脱を欲する者が行う三つの（修行の）方法がある。知識の増大（jñānābhyudreka）とは，あらゆる真理に関する知識のことである。感覚の遮断の道（indriyāyogamārga）とは，（感覚器官の）対象に執着しないことである。渇愛の悪の滅（tṛṣṇādoṣakṣaya）とは，善行悪行の果を滅することである。この三つこそ修するべき行いである。これを行うとすれば，臍[3]に（意識を）集中すべきである。臍を引っ張ると，網を引くと網糸[4]とすべての錘（おもり）が続いてくるのと同じようになる。秘密の知識とはそのようなものである。それは三つの方法の臍となっている。傾注すべき知識とはいったい何か。よく聞くがよい。意識が知識において光輝を与えられる。光輝（prakāśa）とは（光が）

滅しないこと，暗闇においても眼がくらまされないこと，認識根拠によって圧倒されることがないこと，常に不動であり，何かに覆い隠されることがないことである。というのも，これこそ，神の身体なのである。身体の中に現前するのである。そしてそれは将来にわたり，修習され，大きくなる。なぜならば，修習がその本質であるからである。それに続いて意識が修習される。まさにシワの真理がその果実となるのである。」

ウリハスパティ行者が応じて言った。「私めが聞いたところでは，他の見方もございます。それはこうです。

――生命というのは身体の集積であり，それ故に，生存しているかぎりにおいて不安定[5]である。分かりやすく言おう。病人を見よ，武器で討たれ，毒を盛られた者は言うまでもない。彼らは苦痛に喘いでいる。身体と身体の苦痛が別々になる[6]と，死に至るということになる。死とは，付き従う者なく[7]滅び行くことである。このように，はっきり言うと，身体が生命の存在を可能にしている。その究極の意味は，命ある者は流転する。死んだ者は解放されたと言われる。なぜならば（命が）完全に滅した者は，苦痛を味わうことはない。――

以上が（私が耳にした）別の見方でございます。主よ。」

主は答えた。「衆人の前でそのようなことを語るでない。そのような見解は恥ずべきものだ。ものを見る眼の（対象物と認識の）隔たり，（つまり）見られるものと示されているもの（の隔たり）はいかに大きいことか。死とは何かといえば，二度と生まれないことである。（生前の）善行悪行はどうなるのか。そなたの言ったことには正しい判断基準がない。かの太陽は，じかに眼で見られるものだが，いずこより昇りいずこに沈むか知っているか。昇るのは東で，沈むのは西である。そなたはこう言うかもしれない。きのう昇った太陽が（また）今日昇っている太陽（と同じ）であると。あるいはこう言うだろう。太陽が東に行くのを見たから，太陽は戻っていった[8]のだ。戻っていくのを確かに眼で見たと。そなたはそう理解しているのか。（とすれば）それは間違いだ。きのう昇った太陽と今日昇った太陽は別物である。またこう言うかもしれない。その形に違いがない，だからそれらは同一だと。それではいったいそなたは太陽の一群を見たというのか。太陽の数を知っているというのか。となるとそれらは別物という人も間違っていることになってしまう。明らかにそれについてまったく知らないということになってしまう。したがって，見る対象と見る主体とが，正しい認識根拠として適切ではない。これはまさに，きわめて過ちに満ち，迷妄し，闇に覆われて[9]灯明もおぼつかず，ましてや昼間は，口に任せて言葉を弄ぶような人の了簡である。それ故にこそ，聖なる教えに形をなしている正しい認識根拠（pramāṇa）と類似（upamā）の存在理由となっている。なぜならそれらは（正しい）方向を示すものであるからである。故に，その（聖典の）知識からはずれてはならない[10]。だから我が子ウリハスパティよ，正しい認識根拠をなきものとするような言説を，努めて聞き入れぬようにせよ。聖なる教え

は，その本来の性質として，正しい認識根拠と相互に支えあっているのである。いわゆる死の時には，身体内の個我が五大元素から分離する。その粗いもののみ滅し，個我は残り不動である。なぜなら，世界は個我で満ちあふれているからである。したがって，個我は，十の感覚器官と共に五つの微細を身体として動き回る[11]のである。知覚，心，自我意識，サットワ，ラジャ，タマ，上述の[12]激情，怒り，迷妄，そして行為の記憶，これらすべてが個我に付着する。五つの微細が身体となるとき，五大元素を始めとするものが個我の身体に書き込まれる。死の時の個我の身体はこのようである。ではなぜ再び生まれ来るのか。それは心が身体に付着するからである。解説すればこうである。感覚器官の対象に心ひかれない[13]人間はいない。生きている人間は〈食事，睡眠，恐怖，性交〉[14]妻をめとりたい，交わりたいと欲し，死や不幸を恐れ，飲食を求め，快楽に心ひかれる。これが生（あるもの）（janma）の本質である。身体にある（かぎり）心はそのようである。心に果を結ぶことはない。というのも，再び生まれてこない間は，薫習（過去の行為の影響）[15]はすべて，個我に詰め込まれるからである。しかるに，隠棲する聖者（wiku）および最高のヨーガ行者らは感覚器官の対象を捨て去ることができ，必ずや[16]解脱を得るだろう。個我の体をなしている五つの微細が微細（alit）であるがゆえに，微細な身体（sūkṣmaśarīra）と言われる。それが地獄界（narakaloka）に現れた個我の身体である。そこ（地獄）で身体をもつと，苦痛をその経験として得る。かつて人間である間に悪行をなせば，そのために地獄に堕ちる。善行をなせば，そのために天界で身体を得る。快楽をその経験として得る。人間であるときのおこないが善でも悪でもなければ，再び人間に生まれる。生前のおこないが善悪を離れたものであれば，隠棲の行者たる生を受け，主の命を実行することが叶う。しかしながら，生ある間は最高のヨーガ行者に関しては知らないでいる。生命が尽きて，再び（この世に）生まれて初めて，最高のヨーガ行者たる地位を得る。これこそ行者たる存在の中の至高（wiśeṣa）である。（ところで）行者たる者には三種ある。すなわち，行動派（karma）と呼ばれるもの，知識派（jñāna）と呼ばれるもの，そしてヨーガ派（yogī）と呼ばれるものである。行動派というのは，誓戒を（体で）実践する者である。長い時間，供養をし，犠牲祭を執り行い，経文を誦す。また苦行林にいるときには植物を栽培し，収穫された実は神や客人に供される。これが行動派と呼ばれる（行者である）。知識派というのは，神々がすべて自らに体現されている，世界の真理が自らの体にあると知る（行）者である[17]。そういう行者は，知識が清浄無垢で曇りなく，主が人間の体にあるときの御座所であることを知っている。それ故，彼は行動を起こさない。拝礼も犠牲祭も水供も，いかなる（宗教的な）行為[18]もしない。知識で事足れりとし，あれやこれやの行為を漫然と続けることはない[19]。しかしながら，意識には常に注意を傾けている。というのもそれが最高なるもの（wiśeṣa）であると知って喜んでいるからである。このようであるから，知識派と呼ばれるのである。さて最高のヨーガ行者はと言えば，彼は秘義の法を奉じて

いる。聖なる最高のものは特徴をもたず，定義になじまず，正しく言い表すことができない。したがって，認識根拠は三つある。すなわち，師によって，経論によって，自らによって[20]。師によってとは，先生の教説である。経論によってとは，経論の文言によってということである。自らによってとは，自分で聖なる最高のものを獲得しているからである。これらが最高のヨーガ行者の（認識）手段である。だから，先に私がそなたに語ったように，網の臍と呼ばれるのである。

ヨーガとはこうである。ヨーガには六種類ある。六支ヨーガと言われる。

53

〈制感，禅定，調息，凝念，思惟，三昧，これらが六支のヨーガ[21]と言われる。〉

この六支のヨーガとは，聖なる最高のものを獲得したいと思う者の手段である。そなたは虚心坦懐でなければならない。聖なる教えを聞いて，混乱してはならない。制感のヨーガ（pratyāhārayoga）と言われるもの，禅定のヨーガ（dhyānayoga）と言われるもの，調息（prāṇāyāmayoga）のヨーガと言われるもの，凝念（dhāraṇayoga）[22]のヨーガと言われるもの，思択（tarkayoga）のヨーガと言われるもの，三昧（samādhiyoga）のヨーガと言われるものがある。かくして六支のヨーガと言われる。

制感のヨーガとはこうである。

54

〈努めて，また寂静なる心で，感官を感官の目的たる対象から遠ざけること，それが制感と言われる。〉[23]

すべての感覚器官はその対象から引き離される。精神も知覚作用も心も[24]うつろいさまようことは許されない。清浄なる精神によってしっかりと守られる。それが制感のヨーガと呼ばれる。

55

〈対立を離れ，変容なく，静かで，不動なるもの，そのような色形あるもの（rūpa）を常に瞑想すること，それが禅定であると言われる。〉[25]

相対立することのなく，変容せず，煩いなく，静謐で，動揺せず，覆いかくすもののない知識，それが禅定のヨーガと呼ばれる。

56

〈すべての門を閉じ，風を内に閉じこめ，その風で頭頂を割ること，それが調息であると言われる。〉[26]

すべての門は閉じなければならない。すなわち，眼や鼻や口や耳である。先に吸い込

まれた気息が頭頂から放出される。もしこのように（頭頂から）気息を出す修練がなされていないと，鼻から気息が出される。気息を放出するのは少しずつである。これが調息のヨーガと呼ばれる。

57

〈シワ神をその本性とする聖音オームを，真理にひたる心に止住させよ。オームが保持されが故に，凝念と言われる。〉(27)

オームという音は心に住している。それを心に念じなければならない。ヨーガ（修習）の際にそれが消滅し，耳で聞かれることがないとすれば，それはシワ神の本性であると言われる。そのような状態にあるとき，シワ神の身体は空（śūnya）である。これが凝念のヨーガと呼ばれる。

58

〈広がって安定し，音のない虚空のごとくに，その色形あるものについて推考すべきである。それが思択と言われる。〉(28)

最高の意義をもつ聖なるものは，虚空のごとくである（と考えるべきである）。しかしながらそれは虚空とは異なっている(29)。それ（最高の意義あるもの）には音がない。それが最高の意義あるものであると言われる。（ただし）それも虚空も清浄である。これが思択のヨーガと呼ばれる。

59

〈放逸なく，化想なく，欲なく，静やかで，不変にして徴なしと，常に省察せよ。それを以て三昧と言われる。〉(30)

その知識は放逸なく，化想なく，欲も望みももたず，清浄で曇りがなく，消滅することがない。その意識は実体をもたない(31)。なぜなら彼は身体を知覚することがなくなっているからである。認識の四要素(32)を捨て去っているのである。

認識の四要素とは，認識すること，認識されるもの（対象），認識手段，認識主体である。以上が認識の四要素である。これらはいずれも，最高のヨーガ行者に無縁である。これが三昧のヨーガと呼ばれる。

以上が六支のヨーガと言われるものである。賢者の知識の対象となっている。それによって聖なる最高のものが獲得されるのである。最高のヨーガ行者の地位というのはこのようである。それは十の正しい行為（daśaśīla）(33)によって守られる。

60–61

〈不殺生，梵行，誠実，俗事を離れること，不偸盗。この五つがルドラ神により制戒（yama）と言われた。〉[34]

〈怒りなきこと，長上への敬意，清浄，少食，不放逸。この五つが内制（niyama）と言われた。〉[35]

不殺生（ahiṃsā）とは，殺さないことである[36]。梵行（brahmacarya）とは妻を娶ることを欲しないことである[37]。誠実（satya）とは嘘をつかないことである。俗事を離れる（awyawahārika）[38]とは，論争せず，売り買いせず，善悪にとらわれない[39]ことである。不偸盗（astainya）とは，盗まないこと，認められていないのに他人の物を手に入れる[40]ことである。怒りなきこと（akrodha）とは，荒々しい怒りに駆られないことである。長上への敬意（guruśuśrūṣā）とは，目上の人を慕い尽くす気持ちである。清浄（śauca）とは，常に身を清くし，経を唱えることである[41]。少食（āhāralāghawa）とは，食事が重くないということである。不放逸（apramāda）とは，不注意漫然とならないことである。時宜を得てその生をヨーガ三昧の実修の手段とすべきである。その手段を用いることを先延ばしにしてはならない。手段とはヨーガの道である。それは十の正しい行為をその原因としている。（つまり）十の正しい行為がヨーガを形作る。それはいわば住人と住み処（の関係）である[42]。正しい行為と知識の二つを，懸命に実践する。するとその人は不放逸であると言われる。このように，十の正しい行為と言われるものは，三昧の境地にある最高のヨーガ行者を守る。そして，最高のヨーガ行者がそのようにして知識を得ると，第四の境地[43]（にある）と言われる。知識を獲得し，肉体から解放され，幻力の真理から自由となる。それが第四の終極の境地と呼ばれる。（その境地にある者は）生前解脱しているからである[44]。（生前解脱と言うのは）まだ命が終わっていない間に解脱することである。三昧をしている時に目に見えざる真理（niṣkala）を獲得する。そのような者の身体がいったいどうして滅しないであろうか。過去の行為の影響力（karmawāsanā）は消滅しないことを認識しているので，今こそヨーガの火で以て燃やすのである。こうして汚れを滅するのである。覚醒の境地は第四の境地と融合する。この二つが融合する時，七支と七火と七甘露が生じる。

七支とは次の通りである。

62

〈聞くがよい。地，水，火，風，空，知，意が七支（saptāṅga）[45]と言われる。〉

地，水，火，風，空，知[46]，意，これらが七支と言われる。

七火とは次の通りである。

63

〈聞くがよい。嗅ぐ者，味わう者，見る者，触る者，聞く者，思う者，知る者，これが

七火[47]と言われる。〉

嗅ぐ者とは匂いを嗅ぐ者である。味わう者とは六味（ṣaḍrasa）[48]を味わう者である。見る者とは（眼で）見る者である。触る者とは（触れて）感じる者である。聞く者とは（耳で）聞く者である。思う者とは思いを巡らす者である。知る者とは（何かについて）知る者である[49]。これらが七火と言われる。最高のヨーガ行者（のみ）が知る真理の一つである。その理由は，体にある汚れを焼き尽くすことができるからである。

七甘露とは次の通りである。

64

〈声，触，色，味，香，思，知，これが七甘露と言われる[50]。〉

声は聞かれる。触は感じられる。色は見られる。味は味わわれる。香は嗅がれる。思は構想される。知は知られる[51]。これらが七甘露と言われる。すべて行為の所産である。最高のヨーガ行者の知るところである。行為の影響力も同様である。彼（最高のヨーガ行者）が構想したものはすべて彼によって調御されている。調御されているとは，凝念，禅定，三昧の制御下にあるということである。故に調御されていると言われる。彼はすべてについて知っており，心安らかである。だからこそ，常に神に心を傾けている。神への専心は長く持続して途絶えることがない。それ故に，神は彼に具現するのである。

65

〈ここなる火の神は，山と積もった罪悪を焼く。するとシワ神が如意宝珠のごとく，あらゆる想いを掩護する。〉

最高のヨーガ行者のあらゆる罪業，および行為の影響力のすべて，それらは聖なる火[52]を以て神により焼き尽くされる。行為の影響力が滅した後には，彼の三昧は不動で確固たるものとなる。神は常に彼の元にある。彼は如意宝珠（cintāmaṇi）[53]のごとくであり，望みはすべて実現する。願いはすべて叶う。明らかに[54]，彼は八つの自在力[55]を獲得したのである。

66

〈（八つの自在力とは）微細変化，軽浮変化，極大変化，自在獲得，如意，君臨，支配，自在移動。〉[56]

小さくなる，軽くなる，大きくなる，何でも手に入れる，願い通りにする，君臨する，服従させる，どこでも行ける，という（のが八つの自在力である）。

小さくなるとは次の通りである。

67

〈思い通りに粗大な身体を捨てて，きわめて小さな身体となる。また三身からなる微細身と化す。故に，微細変化と言われる。〉[57]

彼の粗大な身体が微細に変わる。微細というのは，あたかも小さな子が水から出たり入ったりしても気づかれないように，無知な者に知らせないで[58]出入りできることである。同様に，最高のヨーガ行者は大地を出たり入ったりするが，彼の移動は妨げられることはない。山や大岩に出くわしても，跡を残さずして突き抜ける[59]。そのとき彼の身体は消えてしまうのである。これが，小さくなると言われる。

軽くなるとは次の通りである。

68

〈かつて重かったものが，すみやかにその有り様を脱して，思うままに，綿のごとく軽い身体を得る，それが軽浮変化ということである。〉

当初はその体は重くとも，最後には綿のように軽くなる。その故に，最高のヨーガ行者は思うがままである。どこを目指そうとも[60]（その目的地への移動が）叶う。天界に昇るも，七つの島（大陸）[61]に渡るも，七つの冥界[62]に下るも可能である。また世界卵を外周することもできる[63]。すべてを支配する力を持ち，望めばどこへでも行けるのである。これが軽くなると言われる。

大きくなるとは次の通りである。

69

〈いずこにも如意に赴き，思うがままその地に居を構える。いずこにあっても恭敬される。それ故に，大物と言われる。〉

よそに旅しても，尊ばれ，敬われ，あらゆるもてなしを受ける。食べ物飲み物などを供される[64]。これが大きくなると言われる。

何でも手に入れるとは次の通りである。

70

〈……[65]あらゆるものを獲得するが故に，あまねく，自在獲得という名で通っている[66]。〉

最高のヨーガ行者が望むものはすべて，いかなるものであれ，探すことも求めることもなく手に入る。彼があらゆるものに対して望みをかければ，業の影響力の蓄積があろうとも，その果は福となる。その福を享受するときに，急いで業の果を味わいつくそうとすれば[67]，その結果，彼は千身となる。（つまり）彼の体は千となり，天界の楽を享受することになる。そこでかれはあらゆる類いの楽を味わう。美女も美食も宝飾も快楽

も[68]。すべて味わった後は，彼は解き放たれ，善行の果に（も）縛られることがない。これが何でも手に入れると言われる。

願い通りにするとは，次の通りである。

71

〈まさに自らによってその姿形が作られ，自らによってそれが得られる。思い通りにその姿形が作られることが，如意[69]と言われる。〉

最高のヨーガ行者の如意に，すなわち，神であれ，人間であれ，獣であれ，彼が望む姿形そのものが彼に現れ，その形相に変化する。それが願い通りにすると言われる。

君臨するとは，次の通りである。

72

〈ブラフマ神，ウィシュヌ神，インドラ神，スーリヤ神のいます所に常に赴き，神々にふさわしい信愛を捧げること，それが君臨[70]と言われる。〉

もし神々のもとへ行って楽しく過ごせば，彼は神々の世界においてブラフマ神，ウィシュヌ神，インドラ神，スーリヤ神を制圧できる。ほかのすべての神格については言うまでもない。というのは，最高のヨーガ行者が主宰するからである。したがって彼はすべての神格に対して司令できる。これが君臨すると言われる。

73

〈支配が及ぶ所はどこにおいても，思い通りに支配する[71]。〉

彼はすべての神格に命令を下す。全世界を掌中に収めているので，もし従わない者があれば討つ[72]。これが支配すると言われる。

どこでも行けるとは，次の通りである。

74

〈体をともなって移動することを望むこと，それが自在移動である[73]。〉

彼（最高のヨーガ行者）の身体はこのようであり，何者であれ従わなければ，神であれ人であれ獣であれ罰を与える。これが自在移動と言われる[74]。

以上，八つの自在力と呼ばれるもので，すべてが最高のヨーガ行者たることの果実である。

もし最高のヨーガ行者の三昧（samādhi）が激しいものであれば根本原質（pradāna）以下，三つの特性までの真理が焼き尽くされる。彼の三昧（の炎）によって舐められるのである。

彼は三つの特性に起因する障害に遭遇する。それらが最高のヨーガ行者に取り憑くの

である。そのすべてが邪魔物となる。その内訳はと言えば，見（darśana）と呼ばれるもの，聞（śrawana）と呼ばれるもの，識（bhoddhawya）と呼ばれるもの，香（gandha）とよばれるものがある。見とは，ヨーガをおこなっているときに神のような姿が見られることである。聞とは，ヨーガをおこなっているときに超人的な力を恵むかのように思われる微細な音声が聞かれることである。さらにヨーガのときに数多の知識が得られたり，未だ習ったことのない聖典の意味がすっとわかるほど賢くなる[75]ことである。これが識である。ヨーガのときに王様の（芳香の）ような香りが鼻で吸われることがある。これが香である。これらすべてがサットワ（純質）の障害と呼ばれる。

ラジャ（激質）の障害とは次の通りである。ヨーガをおこなっているときに，彼（最高のヨーガ行者）の体が揺さぶられるように感じられることがある。体が上昇するように感じられることがある。体が下に押しつけられるように感じられることがある。体が投げ飛ばされるように感じられることがある。体が放り出されるように感じられることがある。体が揺り動かされるように感じられることがある。（体が）パンヤ[76]のように軽いと感じられることがある。これらすべてがラジャ（激質）の障害と呼ばれる。

タマ（暗質）の障害とは次の通りである。ヨーガをおこなっているときに彼（最高のヨーガ行者の）の体（内）がぎっしりと詰まっていると感じられることがある。体が重いと感じられることがある。体が冷たいと感じられることがある。四肢が何かにとりつかれたり，何かで満杯になっているように感じられることがある。暗いと感じられることがある。困ったと感じられることがある。彼の意識が失われたかのようである。これらすべてがタマ（暗質）の障害である[77]。

ヨーガ実修のときにこのように障害に遭遇するとすれば，努めて外的な療法を施すべきである。熱で温めたり，油を塗ったり，薬膳[78]を食したり，温湿布を当てたりすべき[79]である。というのも，これらが障害に対する治療法であると言われるからである。それ故，外的な療法に関する知識によって彼の体が快方に向かう[80]のである。再び元気になれば，またヨーガ実修に戻る（ことができる）。三昧に入れば身体が意識の外におかれる。（ヨーガのときは）身体の感覚をもっていてはならない。身体を意識させる知覚をもっていてはならないのである。なぜなら，それは現世の苦と呼ばれるからである。

我が息子，ウリハスパティよ，これが我が子らの歩む道である。

以上，ウリハスパティの真理が説かれた。

注

（1） mataṅ yan kopalabdha: 意味は訳に示したとおりだが，内容的には前文と意味が重複しており，つながりがはっきりしない。ローマナイズテキストでは，前後に区切り符号を入れており，校訂者が独立した文章としてとらえていることが伺えるが，それではなおさら意味が取り難い。英訳では特に訳出されていない。

（2） 後に続く paramārtha は saṅ hyaṅ wiśeṣa と同義と解釈し，それに即して言葉を補っておく。

（3） pusěr: 一般には「臍」を意味するが，OJED（Zoetmulder 1982）ではこの部分を例示して「(投網の）頂点，先端」の意味も挙げている。あとの比喩をふまえた解釈である。

（4） mata: 本来は「眼」を意味するが，OJED の挙げる “mesh (of a net)” に従う。英訳（Sudarshana Devi 1957, p. 304）では，サンスクリットの akṣin (“eye”) が同じく “mesh” の意味で用いられることを注記している。

（5） humaṅun: OJED に登録していない派生形。語形と文脈から，(hu) maṅguṅ (“unsteady, moving, shaky”) という読みを仮に採用しておく。

（6） bheda: “separation” (OJED) の意味に取る。

（7） tarpahamban: 否定辞 tar (> tan “without”) と pahamban (= mahamban > hamban) からなると解されるが，後者は OJED に登録されていない派生形である。Cf. hamba (“servant, comrade”), mahamba (“to have servants”).

（8） didala nira waluy: didala というテキストの読みは成立せず，英訳者は “dinala?” という別の読みを提示している。ここではそれに沿って，dinalan ira waluy と読んでおくが，dinalan という派生形は OJED には登録されていない。Cf. dalan (“way, road”), adalan (“making one’s way through”).

（9） mapětěṅ: OJED にない派生形。Cf. pětěṅ (“darkness; dark”), amětěṅ (“to darken”).

（10） tan pamahya: pamahya あるいは異読の pamaya は祖形が想定できず意味がとれない。OJED は疑問符つきながら，amāhya (“to go out of”, > wāhya) と解して，本例を引いており，この読みに従っておく。

（11） maparan: OJED にない形。Cf. paran (“object. goal, destination”), apara-paran (“to journey, roam”).

（12） huwus rumuhun:「既に上で（述べた）」の意か。第33偈の古ジャワ解説でこれらに言及している。

（13） tan karaktan: OJED に登録されていない派生形。Cf. rakta (“affected with passion, attached to”).

（14） āhāranidrābhayamaithunañ ca: ca があるので，サンスクリット詩句の引用のようであるが，典拠は不詳。ここだけ断片的な引用であるのも特異に見え，伝承過程で断片的に付加された可能性が高いと思われる。Gonda（1973, p. 458）は古ジャワ文献に見られるサンスクリット語の長い複合語に言及する中で，この箇所を含め Wṛhaspatitattwa に見られる例を紹介している。

（15） wāsanā: 本テキストのサンスクリット第 3 偈に対する古ジャワ語解説を参照（安藤2005, pp. 320–321）。

（16） atyanta: 文脈から，一般的な “excessive; exceedingly” の意味を敷延して，あとの叙述内容を「極めてそのようになる」と強調する副詞として訳しておく。ただし本テキストのほかの用例では明らかに直後の形容詞（lara, dibya, yogya, paramadurgrāhya, wiparīta 等）を修飾して

おり，本例のように直後に主語と動詞が続く構文とは異なる。

(17)　英訳者は "one who knows the entire conception of godliness and of the bhuwanatattwa" というもう一つの解釈を注で示している。

(18)　kaba-kaba: 英訳者が参照した辞書（Juynboll 1902）では意味が通る解釈が見つからなかったことが注記されているが（Sudarshana Devi 1957, p. 313），OJED では "(to be busy with) all sorts of (unnecessary?) activities or observances?" としており，疑問符付きながらも本文脈にも則した意味が提示されている。用例は Rāmāyaṇa (14.44) にも見られる。

(19)　tan pati gawe-gaweni: OJED が挙げる pati の同音異義語の第三番目のもの，つまり，目的もなく漫然と行われる行為の繰り返しを含意する不変化辞と解される。直後の動詞が接頭辞を伴わず，かつ i という接尾辞を伴っている（n は連結の n と解釈できる）のが，OJED でも言及されている特徴である。

(20)　gurutah śāstratah swatah: Sāṃkhyakārikā 51 の Māṭhara 註では，8 つの siddhi の第一である ūha の説明をする箇所で，… evam asya cintayato jñānam utpadyate svataḥ śāstrataḥ guruto vā と，知識の生起の源として，順序は異なるが同じ 3 つを挙げている。Tantrāloka (4.41) では，Kiraṇā という典拠（タントラのテキスト）にあると示しつつ，本テキストと同じ順序で 3 つを挙げる：kiraṇāyāṃ yad apy uktaṃ gurutaḥ śāstrataḥ svataḥ. これは続く注釈によれば，Kiraṇā という Saṃhitā では gurutaḥ, śāstrataḥ, svataḥ の 3 つを以て空（śūnya）を知るべしとしており，さらに，この 3 つの中では，後に挙げたものほど優れている，つまり，sva が最上であるとしている。英訳注（Sudarshana Devi 1957, pp. 313–314）参照。

(21)　ṣaḍaṅgayoga: pratyāhāra・dhyāna・prāṇāyāma・dhāraṇa・tarka・samādhi の 6 つをヨーガの支分（aṅga）としてこの順序で列挙している。インドの Yogasūtra (YS) (2.29) は yama・niyama・āsana・prāṇāyāma・pratyāhāra・dhāraṇā・dhyāna・samādhi の八支としており，これとは異なる。六支のヨーガはウパニシャッドにもあり（eg. Amṛtanādopaniṣad 6, Dhyānabindūpaniṣad 41），シヴァ教のタントラ文献でも言及される。例えば Rauravāgama (7.5) は本テキストとほとんど一致する：pratyāhāras tathā dhyānaṃ prāṇāyāmo 'tha dhāraṇā / tarkaś caiva samādhiś ca ṣaḍaṅgo yoga ucyate. 一方，Prākhyatantra (14.10) は多少語彙が異なるが六項目の順序は一致する：pratyāhṛtir athadhyānaṃ prāṇāyāmaś ca dhāraṇā / tarkaḥ samādhir yogo 'yaṃ ṣaḍaṅgo svayaṃ sthitaḥ. インドのシヴァ教文献における ṣaḍaṅgayoga に関しては，Grönbold（1983）及び Goodall（2004, pp. 351–353）参照。古ジャワの宗教文献では本テキスト以外にもいくつかの文献で六支ヨーガを扱う（Gaṇapatitattwa, Agastyaparwa, Saṅ Hyaṅ Kamāhāyanikan）。以下の注記でも随時言及するが，それらの紹介と分析は別稿で論じる予定である。

(22)　サンスクリット文献では一般的な dhāraṇā ではなく dhāraṇa としている点が興味深い。同じく六支ヨーガに言及する Gaṇapatitattwa や Jñānasiddhānta，及び Saṅ Hyaṅ Kamāhāyanikan (SHK) でも同様である（ただし SHK では，校訂者が dharaṇa という写本の読みを dhāraṇā と修正してテキストにのせている）。古ジャワ文献で dhāraṇā ("maintaining the mind fixed on one spot by resraining all physcial and mental processes") と dhāraṇa ("holding, retention, concentration") が区別なく用いられていることについては Gonda（1973, p. 262）も言及している。

(23)　古ジャワ文献 Gaṇapatitattwa (4) にほぼ同一のサンスクリット偈が引用されている。Yogasūtra は定義が異なる。Cf. YS 2.54: sva-viṣayāsaṃprayoge cittasya svarūpānukāra ivendriyāṇāṃ pratyāhāraḥ.

(24)　citta buddhi manah: この 3 つを並列する表現は本テキストではこの用例のみだが，六支ヨーガへの言及を含む SHK の 1 写本で，yogīśwara の超越性を表現するところに，citta

buddhi manaḥ tyakto というサンスクリットを引き，tĕlas katiṅgal ika ṅuniweh ikaṅ citta, buddhi, manah de nira tan iwö nirwyāpāra と古ジャワ語による解釈を加えている。これらは，最高のヨーガ行者が citta も buddhi も manah も「捨離している（tyakta=katiṅgal）」と明言し，本テキストでの婉曲的な表現（tan wineh maparan-parana）と意味合いを異にしている。

(25)　Gaṇapatitattwa (5) のサンスクリット偈はほぼ同一。Cf. YS 3.2: tatra pratyayaikatānatā dhyānam.

(26)　Gaṇapatitattwa (6) のサンスクリット偈はほぼ同一。Cf. YS 2.49: asmin sati śvāsapraśvāsayor gativicchedaḥ prāṇāyāmaḥ.

(27)　Gaṇapatitattwa (7) のサンスクリット偈は第 3 句（śūnyātmā na ca śṛṇoti）が異なるが他はほぼ同一。Cf. YS 3.1: deśabandhaś cittasya dhāraṇā.

(28)　Gaṇapatitattwa (8) は本テキストと内容的には大きく外れないが，表現はいささか異なっている：cittam ākāśavac chuddhaṃ nākāśam eva tattvataḥ / paramārthaṃ tu niḥśabdaṃ tarkayogo vidyate. Tantrāloka (1.13) では，tarka をヨーガの六支の中でより高いものであるとする：nanu samāne 'pi yogāṅgatve tarkasyaiottamaṃ yogāṅgatvam …

(29)　palenanira: palenan ("difference", > len) nira と区切って読む。

(30)　Gaṇapatitattwa (9) は一部異なった形容を用いている：nirupeṣaṃ nirlakṣaṇaṃ nirālambaṃ niḥspṛham / nirāvaraṇaṃ niḥsādhyaṃ yat samādhis tan nigadyate. Cf. YS 3.3: tad evārthamātranirbhāsaṃ svarūpaśūnyam iva samādhiḥ; YS 3.11: sarvārthataikāgratayoḥ kṣayodayau cittasya samādhi-pariṇāmaḥ

(31)　tatan pawastu: 英訳者は疑問符つきで "without object" とするが，ここでは mawastu (> wastu) の解釈を OJED の "to have a substantial (concrete, material, visible) form" に従う。

(32)　caturkalpana: Jñānasiddhānta 中の samādhi の解説では，同一のサンスクリット詩句のもと，「曇りなく消滅することがない」までは同じだが，caturkalpana への言及を欠いている。一方，同じように六支ヨーガを説明する SHK（1 写本）では，本テキスト同様 caturkalpana を取り上げるが，4 つを列挙する順序が異なっている。本テキストでは wruh・kinawruhan・paṅawruh・maṅawruhi，SHK (Kats1910, p. 155) では kinawruhan・maṅawruhi・paṅawruh・maṅde wruh とする。

(33)　daśaśīla: ここでは明らかに後述の 5 つの yama と 5 つの niyama を指す。

(34)　yama: Cf. YS 2.30: ahiṃsāsatyāsteyabrahmacaryāparigrahā yamāḥ. ここでは不殺生，誠実，不偸盗，梵行，無所有の 5 つを yama として挙げる。同一の定義が，Sāṃkhyakārikā(SK) 23 に対する Māṭhara 註で，sattva の四相の一つ dharma のうちの一項として yama を挙げる中でも提示される。また，Tantrāloka (4.87) でも YS と同一項目が同一順で示される。Pāśupata 派では Pāśupatasūtra (1.9) に対する Kauṇḍinya 注で，まず他派の説として 5 つの yama と 5 つの niyama を示す：ahiṃsā brahmacaryaṃ ca satyāsaṃvyavahārakau / asteyam iti pañcaite yamā vai saṃprakīrtitā // akrodho guruśuśrūṣā śaucam āhāralāghavam / apramādaś ca pañcaite niyamāḥ saṃprakīrtitāḥ. 続いてそれを批判し，これら 10 はすべて yama（一般的な規律）であるとする。Pāśupata 派の yama についての詳細は，原實博士のパーシュパタ研究諸論文（Hara 2002）を参照。ここで他派の説として引用されている yama の定義が，項目（avyavahārika と asaṃvyavahāraka の相違のみ），順序（完全に同一）ともに，ほかのどのテキストよりも本テキストと近似していることが注目される。Manu 法典（4.204）に対する Kullūka 注もこれに近い：ahiṃsā satyavacanaṃ brahmacaryam akalkatā / asteyam iti pañcaite yamā vai parikīrtitaḥ. Cf. Liṅgapurāṇa 1.89.24: asteyaṃ brahmacaryaṃ ca alobhas tyāga eva ca / vratāni pañca bhikṣūṇām ahiṃsā paramā tviha. 古ジャワ文献では，金言集 Ślokāntara (15) が引くサンスクリット偈は，

項目と語順が少し異なる：ahiṃsā brahmacaryaṃ śuddhir āhāralāghavam / astainyam iti pañcaite yamā rudreṇa bhāṣitaḥ. 行者への教示をまとめた Wratiśāsana (3) が本テキストと同一のサンスクリット偈を引用するが，それに続く古ジャワ語の解説は本テキストとはまったく異なる。一方，Sārasamuccaya (265) は satya と ahiṃsā は重複するが他は異なる10の徳を yama とするサンスクリット偈を引いている：ānṛśaṃsya kṣamā satyam ahiṃsā damārjavam / prītiḥ prasādo mādhuryaṃ mārdavaṃ ca yamā daśa.

(35)　niyama: Cf. YS 2.32: śaucasaṃtoṣatapaḥsvādhyāyeśvaraprapaṇidhānāni niyamāḥ. ここでは清浄，満足，苦行，読誦，神への凝念を niyama とし，śauca 以外は本テキストの項目とは相関性がない。Sāṃkhyakārikā (23) に対する Māṭhara 註も yama の場合と同様，YS と同一の定義を引く。Cf. Liṅgapurāṇa 1.89.24: akrodho guruśuśruṣā śaucam āhāralāghavam / nityaṃ svādhyāya ity ete niyamāḥ parikīrtitāḥ. ここでは不放逸ではなく読誦が含まれている。Pāśupatasūtra (1.9) への Kauṇḍinya 注に，本テキストと最も近似する偈が見られることは前注参照。Manu 法典 (4.204) に対する Kullūka 注も同一の項目を同一の順で挙げている。古ジャワ文献では，Wratiśāsana (4) のサンスクリット偈は本テキストと同一，ただし続く古ジャワ語解説は別個である。Ślokāntara は yama については本テキストに近似する（前注参照）が，niyama については何ら言及していない。

(36)　Wratiśāsana (2–10) では yama 及び niyama の各項目に対して，本テキストよりもずっと詳細な説明を古ジャワ語で加えている。Wṛhaspatitattwa と Wratiśāsana の比較研究については別稿で論じる予定である。

(37)　Wratiśāsana (4) と Ślokāntara (15) では brahmacārī（梵行者）を śukla・kṛṣṇa・śabala の三種にわけて解説する。

(38)　一般的なサンスクリットの意味（否定辞 a ＋ vyavahāra）からすれば，「商売・取引に関わらない」「世俗の事に関わらない」あるいは「(法廷で) 係争しない」といった意味だろう。OJED はこの部分を引いて "not concerning os. with litigation or commerce" という意味を挙げるが，短い語句で端的に訳出するのは難しい。

(39)　tan paguṇadoṣa: guṇadoṣa の派生形だが OJED に登録されていない。Cf. gumuṇadoṣa "to judge what is right or wrong (good or bad)".

(40)　tan aṅalap drĕwya niṅ lyan tan ubhaya: テキストの lyaṅ では意味が通らないので，lyan ("other") と読み替える。Cf. Wratiśāsana 3: … tan chidra riṅ dṛwya niṅ len. 英訳者はこの古ジャワ語解説はサンスクリットの adattādāna に対応するものだと指摘する。

(41)　Wratiśāsana（第10偈に対する古ジャワ語解説）では śauca について Śiwāditya・Sūrya・Śiwa への崇拝，額の聖灰・口に聖言など，シヴァ教的な色彩の濃い解説を加えていることが注目される。apramāda に関しても同様である。Sharada Rani 1961, pp. 70–71 参照。

(42)　yatika umuṅguh lawan inuṅgwan ṅaranya: 意味しているところがはっきりしない。英訳も "These are the one which is at its place (?) and the one on which is placed (?)" と疑問符つきである。

(43)　tūryapada: 覚醒，睡眠，熟睡に続く第四の境地のこと。本テキスト第47偈の古ジャワ語解説（安藤2006, pp. 209; 218）参照。古ジャワ語文献では tūrya- ないし turya- という形で現れるが，サンスクリットでは turīya-。Māṇḍūkya Upaniṣad (7) は次のように第四の境地を定義する：nāntaḥ prajñaṃ na bahiḥ prajñaṃ nobhayataḥ prajñaṃ na prajñānaghanaṃ na prajñaṃ nāprajñam / adṛśyam avyavahāryam agrāhyam alakṣaṇam acintyam avyapadeśyam ekātmapratyayasāram prapañcopaśamaṃ śāntaṃ / śivam advaitaṃ catrthaṃ manyante sa ātmā sa vijñeyaḥ.

(44)　Annapūrṇopaniṣad (2.13) で第四の境地を jīvanmukti であるとしている。英訳注 (Sudarshana Devi 1957, pp. 368–369) 参照。他の古ジャワ語文献で jīwanmukti あるいは jīwanmukta の用例

は未詳。

(45)　ウパニシャッドにおける saptāṅga の用例については英訳注（Sudarshana Devi 1957, pp. 371–372）参照。Sudarshana Devi は特に，Praśnopaniṣad (4.8–9) において，本テキスト同様，地水火風空，知と意の７つをそれぞれ人間の感覚器官に対応させて説明する点に注目している。古ジャワ語文献では，Tattwajñāna (46) に各項目の名が挙げられているが，本テキストとは異なる：saptāṅga ṅaranya puruṣa sattwa rajaḥ tamaḥ buddhi manaḥ ahaṅkāra.

(46)　buddhi: 上に引かれているサンスクリットでは buddhikā となっているが，この古ジャワ語解説では buddhi と正しく解釈している。英訳者が注記するように（Sudarshana Devi 1957, p. 371），-kā という接尾辞は特に意味を添えず buddhi と同義（“svārthe ka”）であろう。

(47)　saptāgni: Monier-Williams のサンスクリット語英語辞典（MW, Monier-Williams 1982）には登録されていない用語である。Cf. Tattwajñāna (46): saptāgni ṅaranya manon maṅrĕṅö maṅrasa maṅambuṅ maṅaku mamastvani mamikalpa. Praśnopaniṣad (4.9) に順序は異なるが本テキストの七つの知覚主体が挙げられている：eṣa hi draṣṭā spraṣṭā śrotā ghrātā rasayitā mantā boddhā kartā vijñānātmā puruṣaḥ.

(48)　ṣaḍrasa: サンスクリット第33偈の古ジャワ語解説中に六味のそれぞれが列挙されている（安藤2006, p. 204参照）。

(49)　各項目について，元のサンスクリット語を古ジャワ語的に言い換えているだけである。

(50)　サンスクリット偈前半最後の kathyate は韻律合わせに過ぎず，これが pañcamaḥ であれば文意にも合ってより一般的な表現であろう，と英訳者は注記している（Sudarshana Devi 1957, p. 376）。saptāmṛta という用語は MW に登録されていないが，古ジャワ語文献では Tattwajñāna (46) で saptāṅga の後，saptāmṛta の前で次のように説明される：saptāmṛta ṅaranya śabda sparśa rūpa rasa gandha kinawruhan sinaṅkalpa.

(51)　それぞれ，サンスクリット偈中の項目について，-in- 接中辞を用いた古ジャワ語動詞の受動形で言い換えているにすぎない。

(52)　Śiwāgni: サンスクリットの辞典にこの熟語の登録はなく，サンスクリット文献での用例があるかどうかわからないが，古ジャワ語文献では稀ではない。主に供犠（yajña）との関わりで火神を指す。Cf. Agastyaparwa 355.24: yajña ṅaranya agnihotrādi kapūjan saṅ hyaṅ Śiwāgni pinkādinya; Sārasamuccaya 183.2: phala saṅ hyaṅ weda n inaji, kapūjān saṅ hyaṅ Śiwāgni, rapwan wruh riṅ mantra, yajñāṅga widhiwidhānādi.

(53)　cintāmaṇi: Cf. Rāmāyaṇa (Kakawin) 11.20b: sira (Anilātmaja) cintāmaṇi mĕtwakĕn sakahyun. 他にも多くの古ジャワ語文献に用例が見られる。OJED 参照。

(54)　wyaktinya: wyakti を “evidence” の意味に取り副詞的に訳しておく。他の用例（「説明すると」）（安藤2006, pp. 203; 215）及び OJED 参照。

(55)　kāṣṭaiśwaryan: OJED が訳し分けるように，ka- と -an により抽象名詞となっている（“the quality of possessing the eight supernatural powers”）が，この文脈では元の aṣṭaiśwarya (“the eight supernatural powers”) との意味の相違ははっきりしない。それは第32偈の古ジャワ語解説中の用例（aṣṭaiśwarya と kāṣṭaiśwaryan が続いて用いられている）でも同様であると思われる（安藤2006, p. 202参照）。

(56)　Cf. Svacchandatantra 10.1072cd–10.1073: aṇimā laghimā caiva mahimā prāptir eva ca // prākāmyaṃ ca tatheśitvaṃ vaśitvaṃ yad udāhṛtam / yatrakāmāvasāytvam aṇimādyaṣṭakaṃ smṛtam. 1072cd の部分は完全に一致，1073については，用語（yatrakāmatvam / yatrakāmāvasāytvam）や接続辞が若干異なるものの，列挙される項目は同一である。本テキストでは第14偈の古ジャワ語解説中に，常住シワの真理として列挙されている（安藤2005, p. 325参照）。

(57)　後半の意味が不明：aṇimān triśarīrañ ca yāti tenocyate 'ṇimā. 第3句が明らかに崩れていると英訳者は指摘する（Sudarshana Devi 1957, p. 108）。

(58)　wĕnaṅ umajñānani ikaṅ ajñāna: umajñānani は明らかに ajñāna を基語とする使役形だが，OJED は疑問符つきで ajñāna の下に見出しを掲げて本例を引き，さらに，ここでの ajñāna は sūkṣma と同義で，したがって umajñanani は anūkṣma riṅ と等しいのではないかという解釈を示している。Cf. anūkṣma "to be present invisibly, to make os. invisible; to enter unseen into, conceal os. in, disappear into" (OJED under sūkṣma). これに従えば「微細の中に姿を消す」という意味になろうか。ここでは英訳に準じておく。

(59)　Sāṃkhyatattvakaumudī (ad Sāṃkhyakārikā 23) に「岩をも通る」という同様な表現がみられる：atrāṇimā—aṇubhāvaḥ yataḥ śilām api praviśati.（Sudarshana Devi 1957, p. 384参照。）

(60)　saparanira: saparan ira と区切って解釈する。paran (>para) "goal, destination, place for which one heads" (OJED). Cf. Bhāratayuddha 7.5d: maran ramyâūt sānak adulura sakwan saparana（どこにいてもどこへ行っても兄弟みな共に幸せに仲良くありますように）。

(61)　saptadwīpa: Cf. Tattwajñāna (14) に創造に関する叙述があり，七山，七海，十風，十根とともに，bhulloka を構成していることが示される：ṅka ri bhulloka saptaparvata saptārṇava saptadwīpa daśavāyu daśendriya / ṅkāna pwa samoha ṅke bhulloka ika kabeḥ. そして saptadwīpa の特徴は五大元素のうちの火（tejas）である（七山＝地，七海＝水，十風＝風，十根＝空）とする：ikaṅ saptadwīpa teja rakĕtnya. サンスクリットでは，例えば Liṅgapurāṇa (1.46.1–3) に saptadvīpa に関する詳しい描写がある。英訳注（Sudarshana Devi 1957, pp. 388–389）及び Zieseniss の研究（1958, p. 185）を参照。

(62)　saptapātāla: Tattwajñāna (14) で7つの冥界の名を列挙している：nihan taṅ saptapātāla / pātāla vaitala nitala mahātala sutala talātala rasātala. 他の古ジャワ語文献では Rāmāyaṇa (Kakawin) (19.12c) に羅刹を戦に呼ぶ法螺貝の響きが冥界を揺さぶるという表現で言及される：śabda nyātyughra mapyak prakaṭa kadi gĕlap saptapātāla molah. サンスクリットでは Liṅgapurāṇa (1.45.8–23) でさらに詳しく7つの冥界を描いている。英訳注（Sudarshana Devi 1957, pp. 388–389）参照。

(63)　dadi kumuliliṅ i heṅ niṅ aṇḍabhuwana: i は前の動詞の接尾辞として kumuliṅi と読む（"to be or go around st., surround, encircle"）(OJED)。aṇḍabhuwana はおそらくサンスクリットの bhuvanāṇḍa に等しく，現地化して複合語の語順が前後したものと推定される。Gonda（1973, p. 463）はこの語も含め，限定語が後分に置かれ現地起源と思われるサンスクリット由来語の複合語を取り上げている。

(64)　テキストの wineh bhojana apan aprabhṛti という区切りは意味をなさないので，wineh bhojanāpānaprabhṛti (> bhojana-āpāna-prabhṛti) と直して読む。OJED の āpāna の用例参照。

(65)　āsīt tasmāt vilāśeva adhivastugataḥ bhavet: このサンスクリット偈前半部分はおそらく伝承過程で崩れてしまっているため解釈できない。英訳者も "corrupt" とし訳出を試みていない。

(66)　Cf. Kṣemarāja ad Svacchandatantra 10.1073: prāptiḥ saṅkalpamātrāt tattaddeśāvāptiḥ.

(67)　saṅka ri gyā nirân hĕntya phala niṅ karma: ここで用いられている hĕnti の派生形の意味を，aṅhĕntyakĕn や umhĕntyakĕn と等しく "to finish u up" ないしは "to do st. completely" (OJED) と解しておく。

(68)　yan anakbi rahayu mwaṅ bhogôpabhoga paribhoga: bhoga・upabhoga・paribhoga は本テキスト第28偈とその古ジャワ語解説でも言及される（安藤2006, pp. 200; 214参照）。それをうけて，ここでは意味をとって訳し分けておく。

(69)　prākāmyam: Cf. Kṣemarāja ad Svacchandatantra 10.1073: prākāmyam ekasyaiva yugapan

nānāśarīrakaraṇe śaktatā; Sāṃkhyatattvakaumudī (ad Sāṃkhyakārikā 23): prākāmyam—icchānābhighātaḥ yato bhūmāv unmajjati nimajjati ca yathodake.

(70)　iśitvam: Cf. Sāṃkhyatattvakaumudī (ad Sāṃkhyakārikā 23): īśitṛtvam—yato bhṛtabhautikānāṃ prabhavasthitilayānām īṣṭe.

(80)　伝承の過程でサンスクリット偈が一行欠落したと思われる。とりあえず残りの部分を語義どおりに訳しておくが，英訳者は "Sanskrit is not clear" として訳出を保留している（Sudarshana Devi 1957, p. 110）。

(81)　dumwaniya ri lwiranya: dumwani ya ri lwiranya と区切って解釈する。ただし dumwani という形が適正かどうかは，OJED 自体も疑問符をつけている（dwan の下位項目参照）。意味は dumon のいくつかの訳語のうち，文脈に沿って "to attack" ととっておく。

(82)　yatrakāmāvasāyitva: Cf. Kṣemarāja ad Svacchandatantra 10.1073: yatrakāmāvasāytivaṃ saṅkalpamātrād deśakālasvabhāvavyavahitavastuniścayaḥ; Sāṃkhyatattvakaumudī ad Sāṃkhyakārikā 23: yac ca kāmāvasāyitvaṃ sā satyasaṅkalpatā yena yathā 'sya saṅkalpo bhavati bhūteṣu tathaiva bhūtāni bhavanti / anyeṣāṃ niścayāḥ niścetavyam anuvidhīyante yoginastu niścetavyāḥ padārthāḥ niśyayam. 英訳注（Sudarshana Devi 1957, p. 401）も参照。

(83)　古ジャワ語解説の内容がサンスクリット偈と相応せず，必ずしも yatrakāmayitva の意味付けとはなっていない。

(84)　古ジャワ語では prajñā は名詞としても形容詞としても用いられるので，ここでは文脈から "wise, clever" の意味にとる。

(85)　kapuk: 学名 Ceiba pentandra，英語では kapok，Javanese Cotton とも通称される。日本ではパンヤノキ，カポックノキと呼ばれる。紡錘の果実の中にパンヤと呼ばれる綿状の繊維が詰まっており，クッションや枕などの詰め物に利用される。

(86)　Yogasūtra 1.30でもヨーガ実修の障害に言及する：vyādhistyānasaṃśayapramādālasyāviratib hrāntidarśanālabdhabhūmikatvānavasthitatvāni cittavikṣepās te 'ntarāyāḥ. ここでは病気・無気力・疑惑・軽率・怠惰・耽溺・謬見・（三昧に入る）準備不足・（三昧での）不安定の 9 つが，すべて心の乱れであり，三昧に対する障害であるとしているが，本テキストのような triguṇa との関連には触れていない。

(87)　tapyak-tapyak: OJED は意味不明とし（疑問符のみ），本用例を引いて，何か治療のために食されるものだろうと推定する。他の用例は不詳。

(88)　tapělana riṅ aṅět-aṅět: Cf. tinapělan "(passive) to spread with a layer (of) "; aṅět-aṅět "something warm, means of warming" (OJED). これらの意味を取って意訳しておく。

(89)　taṅgal-taṅgalanya: OJED（taṅal の項の用例）が提示するように，taṅgal-taṅgalěnya と読む。原形 tinaṅgal-taṅgal の意味を "(passive) to give renewed strength" に取る。

参照文献

安藤　充

2005　「ウリハスパティの真理(1)」『人間文化』第20号，pp. 319–333.

2006　「ウリハスパティの真理(2)」『人間文化』第21号，pp. 199–219.

Bhatt, N. R.

1979　*Sārdhatriśatikālottarāgama*, Pondichery.

1985　*Rauravāgama*, Vol. 1, Pondichery.

1988　*Rauravāgama*, Vol. 3, Pondichery.

Dwivedi, R. C. et al.

1987 *The Tantrāloka of Abhinavagupta with the Commentary of Jayaratha*, 8 vols., Delhi.

Gonda, J.

1933–36 'Agastyaparwa, uitgegeven, gecommenteerd en vertaald', in *BKI* 90, pp. 329–419; 92, pp. 337–458; 94, pp. 223–285.

1973 *Sanskrit in Indonesia*, New Delhi (2nd ed.).

Goodall, D.

2004 *The Parākhyatantra: A Scripture of the Śaiva Siddhānta*, Pondicherry.

Grönbold, G.

1983 'Materialien zur Geschichte des Ṣaḍaṅga-Yoga im Hinduismus', *Indo-Iranian Journal* 25, pp. 181–190.

Hara, M. (J. Takashima ed.)

2002 *Pāśupata Studies*, Vienna.

Juynboll, H. H.

1902 *Kawi-Balineesch-Nederlandsch Glossarium*, 's-Gravenhage.

Limaye, V. P. and R. D. Vadekar

1958 *Eighteen Principal Upaniṣads*, vol. 1, Poona.

Madhusudan Kaul Sastri

1986 *The Svacchandatantra with Uddyota of Kṣemarāja*, 4 vols., Delhi (1st reprint).

Mandlik, V. N.

1992 *Mānava-Dharma Śāstra*, 3 vols., New Delhi (reprint).

Monier-Williams, M.

1982 *A Sankskrit-English Dictionary*, Oxford (reprint).

Nihom, M.

1995 'Sāṃkhya and Pāśupata Reflexes in the Indo-Javanese Vṛhaspatitattwa', *Wiener Zeitschrift für di Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*, XXXIX, pp. 203–220.

Radheshyam Chaturvedi

2004 *Svacchandatantram*, 3 vols., Varanasi.

Raghu Vira

1962 *Sārasamuccaya*, New Delhi.

Ramesh Chandra

1935 *Vācaspatimiśra's Sāṃkhyatattvakaumudī*, Calcutta.

Sharada Rani

1957 *Ślokāntara: an Old Javanese Didactic Text*, New Delhi.

1961 *Wratiśāsana: a Sanskrit Text on Ascetic Discipline with Kawi Exegesis*, New Delhi.

Shastri, R. A. (ed.)

1940 *Pasupata Sutras with Pancharthabhashya of Kaundinya*, Trivandrum.

Soewito Santoso

1980 *Ramayana Kakawin*, 3 vols., New Delhi.

Sudarshana Devi

1957 *Wṛhaspatitattwa: an Old Javanese Philosophical Text*, New Delhi.

1958 *Gaṇapati-tattwa: an Old Javanese Philosophical Text*, New Delhi.

1962 *Tattwajñāna and Mahājñāna*, New Delhi.

Supomo, S.

1993 *Bhāratayudda: an Old Javanese Poem and its Indian Sources*, New Delhi.

高木 訥元

1991 『マータラ評注の原典解明』法蔵館.

Vishnu Prasad Sarma (ed.)

1922 *Sāṃkhyakārikā, Māṭharācāryaviracita-Māṭharavṭittisahitā*, Benares.

Zieseniss, A.

1958 *Studien zur Geschichte des Śivaismus: die Śaiva-Systematik des Vṛhaspatitattva*, New Delhi.

Zoetmulder, P. J.

1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.

<e-texts>

Liṅgapurāṇa, input by Ashok Aklujkar, on GRETIL (Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages)

Yogasūtra, input by members of the Sansknet Project, on GRETIL.

Svacchanda-Tantra, input by Dominic Goodall, Mei Yang, Nibedita Rout, R. Sathyanarayanan, S.A.S. Sarma, on GRETIL.

（科学研究費補助金・基盤研究(C)・課題番号16520048「古ジャワ世界におけるシヴァ教の受容と展開」の成果の一部）